

五戸総合病院での研修を終えて

三沢市立三沢病院
研修医 渡邊 理樹

今回私は地域医療研修として五戸総合病院へ伺いました。医師の不足する医療的僻地の実態を学んで来い、という厚生労働省の企みなのでしょう。しかし首都圏の研修医ならまだしも、私が普段勤務しているのは三沢です。決して医療的資源が充足している土地ではありません。三沢も十分僻地だろう、と。そして状況の変わらない五戸では大して学ぶことがあるわけでもなかろう、と。そう思っていました。しかしその考えは大きく覆されました。

三沢病院も含め、多くの研修医が研修を行う病院は急性期病院です。急性期病院からは疾患が治癒して元気に自宅退院される患者さんもいる一方で、急性期を乗り越えはしたものの他院に転院となる方もいらっしゃいます。五戸総合病院はそうした患者さんの転院先病院の一つです。これまでその実際を知らなかった私はどこか、病を抱えたまま転院となる患者さんもまた疾患が治癒したかのような気になっていたと思います。しかしそれはその患者さんが、私の狭い視野に映らなくなっただけのことでした。実際にはそうした患者さんは五戸のような病院に転院され、引き続き病と戦ったり、病とともに最期を迎えたりしています。当たり前ですが、患者さんはひと続きの人生を生きています。我々は急性期病院ではその人生の一瞬に出会うだけです。その後の実際を知らなかった私は、退院した人＝健康になった人、という錯覚に陥っていたのだと思います。医師は自分が出会う患者さんのその一瞬のみに目を向けるのではなく、その先を見据えて患者さんのひと続きの人生と関わらなければならないということを学びました。

さて、五戸で出会った患者さんの中で、忘れられない方がいます。ご自身が重篤な状態にも関わらず、いつも笑顔で沢山の話をして下さいました。今のお気持ちや、ご自身の生と死について。楽しかったこと、後悔していること、もう一度したいこと。苦難の中にあるだろうに、穏やかな笑顔で多くのことを教えて下さいました。かのゲーテが「真の強さとは、悲しみや苦しみに打ち勝つことではなく、不安や暗闇の中で安らげる心のことだ。」というようなことを言っていたと思いますが、まさにその通りだと思います。真の強さを持ったあの方を私は強く尊敬します。医師は偉い先生の書いた教科書から学んだ机上の知識を偉そうに患者さんに教えるではありません。患者さんから教えて頂くのです。私は医師として揺らいではならない一つの軸を五戸で得たように思います。

語り出すと止まりませんから、この辺でまとめに入ります。私は環境の変化というものが苦手な人間なので、研修初日は重い足取りで五戸へと向かったことを覚えています。ですが五戸を去る研修最終日は、とても寂しく名残惜しい気持ちでいっぱいでした。まだここで学びたいことが沢山あり、対話し、関わりたい人々が大勢いました。奇妙な見目でどこの馬の骨とも知れぬ私を暖かく迎え入れて下さった安藤院長、他科の先生方、看護師のみなさん、全てのスタッフのみなさん、何より研修医の拙い診療に嫌な顔一つせず付き合ってくれた患者さん方に厚く御礼申し上げます。あと一緒に周った和田先生も。本当

にありがとうございました。